

Title	京大広報 No. 141
Author(s)	
Citation	京大広報 (1977), 141: 643-646
Issue Date	1977-06-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/209550
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 141

京都大学広報委員会



人文科学研究所附属・東洋学文献センター（人文科学研究所分館）

（1930年（昭和5年）竣工。武田五一、東畑謙三の両氏による設計で、ユニークな建築として注目されている。所在地：左京区北白川東小倉町一関連記事3ページ＜紹介＞）

目 次

分限処分の審議経過(3)…………… 2

学生懇話室の活動…………… 2

＜随想＞

省エネルギー問題と京大

名誉教授 大谷泰之…… 3

＜紹介＞

人文科学研究所附属・

東洋学文献センター…………… 3

昭和52年度創立記念日行事の開催…………… 4

＜大学の動き＞

分限処分の審議経過 (3)

本学経済学部竹本信弘助手の分限処分の審査については、その後、事務局と参考人の代理人との間において再三接触が行なわれた結果、参考人の陳述に関する諸条件について話し合いが整い、5月31日開催予定の評議会に参考人の出席を得ることとなりました。その際参考人には審査説明書の(注) (審査の理由)に記載の「昭和47年10月1日以降無断欠勤を続け、現在なお行方不明である。」との事実を中心として、今回の審査の審査理由となっている事項について陳述願うことになりました。

また、参考人の代理人が参考人に対し助言を与

えるための付添人として同席することとなりました。

なお、評議会は引き続き、無断欠勤と行方不明の背景となる諸事情のそれぞれにつき逐一法規問題との関連において精細に審議中であります。

評議会においては十分慎重、公正に審議を行なっておりますので、各位の御理解をお願いする次第であります。

昭和52年5月24日

京都大学総長 岡 本 道 雄

(注) 審査説明書の(審査の理由)

上記の者は、昭和47年10月1日以降無断欠勤を続け、現在なお行方不明である。よって、国家公務員法第78条第3号により免職することが相当である。

学生懇話室の活動

時計台の西側、赤煉瓦の古色蒼然たる建物の一角に全学生の厚生補導をあずかる学生部の諸施設があって、その西端の別棟に創設以来21年余を経た学生懇話室という名のカウンセリング・センターがひっそりとある。創設当初には電話で「え、学生公安室？」などと聞きかえされて、カウンセラーの方で戸惑ったものであるが、今では「500円貸してもらえませんか」といった学園生活の始発点から、「長らくお世話になりました。一足お先に失礼します」と訣別に來る人生の終着点にいたるまで、学生個人の巾広い問題・悩みが持ちこまれるカウンセリング専門施設として、その活動は漸く全学に親しまれるようになっていく。教官・父兄からの委託も少なくないが、学生の大半は困ったことがあれば何はともあれ訪ねて来る。だが、「過保護」、「思想善導」どころか、そこでは個々の主体性が最高に尊重され、自ら問題を解決できるようになるまで個人の秘密厳守のもとにキメ細かい個人相談・心理療法・ケースワーク等の援助が行なわれている。その来談件数は、在籍8年・休学4年の計12か年に及ぶ事例を最長として実員約8,300名、延べ約18,000件(52年3月末現在)に達し、近年、集団療法や公開シンポジウム等も実施されつつある。

要するに、これらの活動は、全学生一人ひとりの効果ある修学生活の達成への援助を介して、さ

さやかながら「縁の下」から大学教育の「隙間」を埋めようとする役割を負っていると言えよう。他方、これらのサービスの質的向上のために修学諸問題(例えば転学・留年・休退学・自殺等)へのリサーチも不断に実施され、その研究成果は毎年、紀要等で全学・各大学に報告されている。その一面では、学生懇話室は大学教育についての一つの研究センターでもあろう。

さらに、ドアを開ければFM音楽が流れ、花がある、金魚が泳いでいる、時にはコーヒーも出るといった軽サロン風の懇話室は、不眠症の学生が一室のソファで昼寝して授業に出ていくものもあって「船のドック」でもあり、また、新入生の来談が多い点では「水先案内」にも似たオリエンテーション・センターでもあり、また、全自殺学生の3割以上が来談経験を有する点では「心の110番」としての救急センターでもあろうか。精神疾患では保健診療所精神科と協力して治療と修学との両立に向かって最善の努力がなされてきている。

これらの多面的な活動は、わが国大学の間で学生個々の福祉実現のために開拓的役割を果たしつつあるが、ただ、大学大衆化進展とともに増加してきた大規模大学特有の多様な修学不適應問題には、流用定員のみのカウンセラー3名・事務官1名では十分に対応し難く、創設以来いぜんスタッフ計4名という古い体制の抜本的強化拡充が数年前より不可欠となっている。

(学生懇話室)

され、24年に新たに発足した人文科学研究所に引き継がれたものであるが、50年5月より本センターが使用するようになった。スペイン風ロマネスク様式の白堊の殿堂で、建築学的にも貴重な建物である。

書庫は中央に吹抜けを設け、三層になっている。収容力は10万冊を見込み、建設当時は最高級のものであったが、蔵書数22万5千冊に及ぶ現在では、書物は書庫からあふれだし、一階の各研究室や東一条の人文科学研究所本館に分置する状態になっている。新書庫の増築が特に実務担当者から望まれている。閲覧室は眺望のよい二階にあって、座席数は26である。講堂としても使用でき、毎年の夏期講座はここで開かれる。

センターが行なっている業務は、(1)資料の収集、(2)資料の公開、(3)『東洋学文献類目』の出版、(4)国内漢籍所在調査、などである。

(1)は、本所未収の漢籍を写真複製本によって補い、資料の一層の充実を図るもので、いずれは国内の主要な漢籍のほとんどすべてが、本センターにおいて閲読できるようになる。現在、特に明人文集と今地志（明清の地志を「今地志」と称する）の充実に努めている。

(2)は、センターの最も一般的業務である。昨年度には、延べ2,536人が37,963冊（うち546人の外国人が10,212冊）の本を利用した。ただ、コピー・サービスをしているために書物のいたみが甚しく、保存対策が急務となっている。

(3)は、東洋学に関する日・中・朝および欧文の単行本と論文の年度別分類リストであり、昭和9年以来刊行され、海外でも好評をえている。

(4)は、国内現存の漢籍総目録の作成という遠大な計画の一環をなす調査である。

（人文科学研究所）

昭和52年度創立記念日行事の開催

本学では、創立記念日（6月18日）を祝し講演会、音楽会を以下のとおり開催いたします。

本学教職員、学生の来聴を歓迎します。

講演会

講 師 江 崎 玲 於 奈（理学博士）

（略歴）

1925年京都市生まれ。三高出身。1947年東京大学理学部物理学科卒業。神戸工業に入社。1956年ソニーに転じ半導体の研究に従事。1958年「トンネル・ダイオード」について学会に発表、1959年「エサキ・ダイオードの発明およびその機能の理論的解明」により仁科記念賞および朝日賞を受賞。1960年渡米、IBM中央研究所特別研究員となる。1965年「エサキ・ダイオードとその応用の研究」により日本学士院賞を受賞1973年ノーベル物理学賞を受賞。1974年文化勲章を受章。

演 題

サイエンスとエンジニアリングの結びつき
—半導体の発展を顧みて—

日 時 昭和52年6月17日（金）
午後1時30分～午後3時30分

場 所 法経第四教室

音楽会

演奏者 小 林 道 夫（チェンバロ奏者）

（略歴）

1933年東京都生まれ。東京芸大卒業。1956年毎日音楽賞新人奨励賞を受賞。1965年から1966年にかけて西独に留学、ギュンター・ワイセンホルン、イルムガルト・レヒナーの両氏に学ぶ。同年チェンバ

ロ奏者としてフランクフルト・パッハオーケストラと協演。帰国後チェンバロとピアノの独奏および伴奏者として活躍。1970年第1回鳥井音楽賞を受賞。同年エルンスト・ヘフリガーとアメリカへ、フィッシャー＝ディスカウとヨーロッパへそれぞれ演奏旅行し高く評価される。1972年ザルツブルグ国際財団モーツァルトウム記念メダルを授与される。1973年以後日本各地でリサイタルを開き活躍。

演奏曲目

パッハ	フランス組曲 第6番	ホ長調
クーラン	第6組曲 全曲	刈り入れをする人 他
ラモー	クラヴサン組曲	ホ短調より
パッハ	フランス組曲 第5番	ト長調

日 時 昭和52年6月17日（金）
午後6時開演

場 所 京都府立労働会館
京都市中京区烏丸通丸太町下ル
（市バス 烏丸丸太町下車）

入場無料

備考 1) 職員証または学生証を持参してください。

2) 定員1,300名 先着順とします。

（学生部）